

「AI にしかできないこと」

—初稿—

2026/9/14

〈人物表〉

高橋 翔太
たかはし しやうた
(34)

丸バツ食品の社員

佐竹 美香
さたけ みか
(28)

高橋の同僚で、後輩

加藤 浩輔
かとう こうすけ
(43)

高橋の上司で課長

相田 亮二
あいだ りやうじ
(40)

AI活用コンサル

本多 壮一
ほんだ そういち
(67)

丸バツ食品の社長

北川 直人
きたがわ なおと
(38)

トレーニングジムのオーナー

高橋の同僚らA・B

1. 丸バツ食品本社ビル・外観（朝）

いかにも大企業な高層ビル。「丸バツ食品」のロゴ。
加藤の声「高橋、結局何が言いてんだよ」

2. 本社ビル・小会議室（朝）

こぢんまりした会議室。十人弱が会議中。

プレゼン中の高橋翔太（34）、脂汗が止まらない。

加藤「お前の訴求ポイントがどこか全然分かんねつつてんの」

課長・加藤浩輔（43）、資料を丸め、机を叩く。

スクリーンには「新商品提案 マッチョ向け高タンパク冷凍弁当」の字と、写真や価格など投影。

加藤「一個千円って高過ぎんだろ。マッチョ向けってターゲットもニッチだし、どこ訴求なんだよって」

高橋「そ、そちらにつきましては……」

高橋、緊張のあまり過呼吸に。加藤、ため息。

加藤「またかお前、わざわざ会議の時間取ってんのによお……」
と、講釈を垂れ始める。

会議室の他の面々、気まずそう。

ふと高橋、後輩の佐竹美香（28）と目が合うが、
美香、目を逸らす。

高橋、必死に呼吸を整える。

高橋の胸ポケットには、ペン型の電子端末。

端末の小さな赤いランプが点滅中。高橋の息と心音。

3. （回想）本社ビル・大ホール・入口（朝）

「A-活用プロジェクト説明会」の立札。

相田の声「どんなに賢いA-にも、弱点はあります」

4. （回想）本社ビル・大ホール（朝）

社員ら千人以上の前。壇上のA-活用コンサル・相

田亮二（40）、熱を込めスピーチ。

相田「それは、学習していないことについては一切答えられないという点です」

画面にはそれっぽいスライドが表示。

相田 「例えばＡーは、あなたの仕事について何も知りません」

高橋、ボケっとした顔で聞いていたが、居眠り。

相田 「日々の会議や現場で何が話され何が決まったのか、そんなことすら知らないＡーに業務が任せられるでしょうか」

相田、先ほどのペン型端末を取り出す。赤く点滅。

相田 「そこで皆さんにＡーの目となり耳となってほしいのです」

モニター、相田の言葉が一字一句投影されていく。

相田 「これはただのボイスレコーダーではありません。今日から気の利かないＡーを優秀な社員に変える魔法の杖です」
全員にペン型端末が配られる。なんだこれという顔。
社長・本多壮一（６７）、後ろでその様子を眺める。
居眠り中の高橋、はっと目を覚ます。

加藤の声 「訴求ポイントがねえんだよ！」

5. 本社ビル・小会議室（朝）

加藤 「って聞いてんのか、高橋」

と、資料を床に投げる。

過呼吸の高橋、胸ポケットの端末がブブッと振動。
前の画面に、何やら通知。

生成Ａーアプリ「アイちゃん」のアイコンが表示。
突如、画面に「訴求ポイントは……」という文字が
映し出されていき、流暢なＡー音声を読み上げ。

アイちゃん「訴求ポイントは価格です。同様の栄養価の商品に比べ一食二百円も安く、優位性があります」

会議室の面々、呆気に取られる。

アイちゃん「市場規模も近年の筋トレブームにより、決してニッ

チとは言えません」

加藤 「……え？ あ、そうなの？」

アイちゃん「加藤さん、資料の後ろの方にも書いてあります」

高橋、恐る恐る頷く。

加藤、資料をパラパラ。じっと見る。

加藤 「……競合調査の数、少なえじゃん。ダメだろこれじゃ」

高橋 「た、大変申し訳——」

またペン型端末、ブブッと振動。

アイちゃん「競合調査を踏まえても問題なく……」

直ちに画面に調査結果が映し出される。

加藤、しばらくバツの悪い顔で眺める。

加藤「……まあ、いんじゃない」

高橋、黙って頭を下げる。

ふと、美香と目が合う。心なしか笑顔。

6.

居酒屋・外観（夜）

雑居ビルのワンフロア。チェーンの居酒屋。

7.

居酒屋・店内（夜）

美香ら会議室にいた数名で飲み会。

打って変わって賑やかな雰囲気。加藤はいない。

同僚A「本当Aーさまさまだよねー」

美香「今までも調べ物には使ってましたけど、なんかまた一つレベル違いますよね」

同僚A「会議終わったら仕入れ先の候補出からアポ取りメールの下書きまで勝手にやってて、マジ驚いたわ」

同僚B「あのコンサルの人がすごいよね。シゴデキ」

一同、盛り上がる。

美香の隣で高橋、控えめにビールを飲んでいる。

美香「もう、高橋さんの企画が通ったお祝いなんですよ」

高橋「……ありがとう、佐竹さん」

と、控えめに頭を下げる。

美香「私高橋さんの企画通ればいいなってずっと思っていました」

高橋「え？」

美香「アイデア面白いですもん。加藤さんのウケが悪いだけで」

高橋「ははは、ここだけの話ね」

美香「ていうか加藤さんのアレ、大丈夫ですか？」

高橋「……うん、大丈夫」

と、笑顔で頷いてみせる。

美香「商品化、頑張りましょうね」

8.

本社ビル・オフィスフロア（昼）

スクリーンにはマッチョ弁当のイメージ画像。

高橋、同僚らを前に説明するが、言葉に詰まる。

と、胸ポケットの端末、ブブッと振動。

アイちゃん「つまりこういうことですね……」

と、説明スライドを生成して投影。

美香、うんうんと頷く。

高橋、落ち着きを取り戻し、説明を続ける。

× × ×

テーブルに並べられた試作品弁当の数々。

同僚ら、口々に「美味しい」など、反応は上々。

アイちゃん「私も食べたーい」

一同、ツッコむ。高橋も思わず笑う。

ふと、課長席の加藤と目が合い、しゅんとなる。

× × ×

高橋だけ居残り中。疲れているのか、眠そう。

PC画面、「プレゼン資料作つといて」と入力。

プレゼン用資料が生成される。高橋、満足げ。

ふと課長席を見てしまう。加藤はいない。安堵。

9.

トレーニングジム（昼）

ジムには、筋トレに励む人々。

その一角。テーブルに座るマッチョ。ジムのオーナー

ー・北川直人（38）、真剣に資料を読んでいる。

北川「……一食でタンパク質40グラムは優秀っすねー」

向かいに並んで座る高橋と美香、うんうんと頷く。

高橋「お、お客様ごと10グラム単位で調整可能となっております」

北川「マジすか？ だってよ？」

と、右腕で力こぶを作り、話しかける。

美香「……ハハハ」

高橋「全国展開されている御社のジムとぜひ業務提携を——」

北川「これ、大麦と白米混ぜてますけどGI値どんなもんすか」

高橋「ああ、ええと……」

北川「あと油はオメガ3（スリー）すか、MCTすか？」

高橋 「……少々お待ちください」

高橋、胸元の端末の点滅を見て、安堵。
が、ブブっと言わない。

高橋 「……？」

PC画面。ネットが繋がっておらず、焦る。

北川 「やっぱそこなんすよねー。マッチョへの訴求ポイントは」

高橋、ビクツとなる。美香、何か察して、

美香 「一度、社内に持ち帰って確認させて——」

高橋、過呼吸に。

北川 「え、大丈夫すか？」

美香 「高橋さん、高橋さん？」

10. 公園（夕方）

高橋、ベンチにしょんぼり腰掛ける。手には資料。

美香、缶コーヒーを渡し、座る。

高橋 「俺さ、会社入る前はこんなじゃなかったんだよ」

美香 「え？」

高橋、資料をぐっと握る。「訴求ポイント」の字。

静かにツーツと涙を流す。

美香 「……高橋さん？」

高橋 「アイツさえいなかったらさ、良かったんだよ」

美香、どうしたものかとあたふたしている。

高橋、また過呼吸。

美香、ややあって、高橋の手をギュッと握る。

美香 「大丈夫です。少なくとも今は、いませんから」

高橋、次第に過呼吸が収まる。

ハッとして、美香の手を離す。

高橋 「……ごめん。ありがとう」

美香 「……あの、よかったら、話聞きましょうか？」

高橋の胸ポケットの端末。赤く点滅。

11. 本社ビル・オフィスフロア（朝）

出勤する高橋、元気無くオフィスフロアへ入る。
と、出てくる加藤と鉢合わせ。

高橋 「お、おはよう、ごさい——」

加藤、高橋を見ず、虚な目で出ていく。
それを見て噂話する社員ら。

社員A 「加藤さん、人事部に呼び出されたらしいよ」

社員B 「マジ？ ついにかー」

人事部の社員らしき人、やって来て、高橋を呼ぶ。

12. 本社ビル・会議室（昼）

人事の社員、高橋に何か伝える。他には誰もいない。

高橋 「え？」

13. 本社ビル・オフィスフロア・（昼）

加藤、席で段ボールに荷物をどんどん詰めている。

社員ら、加藤を見てコソコソ噂話。

14. 本社ビル・階段室（昼）

高橋、呆然としたまま、ゆっくり階段を降りていく。

次第に足取りは軽くなり、スキップ。鼻歌。

アイちゃん 「高橋さん、ご機嫌ですね」

15. 本社ビル・オフィスフロア（昼）

課長席、加藤はいない。

笑顔の高橋、席でリモート会議中。相手は北川。

画面にはマッチョ弁当の説明スライド。

胸ポケットの端末。赤く点滅。

アイちゃん 「G値も低く、油はMCTオイルです」

画面の北川、力こぶを作り笑顔で、

北川 「……全国展開、いっちゃいましょう！」

高橋 「ありがとうございます！」

オフィスの面々、声の大きさに驚く。

16. 居酒屋（夜）

企画メンバーで打ち上げ。

高橋 「今日は俺の奢りだからさ、飲んで飲んで！」

皆、高橋の様子に少し困惑。

17.

オシャレなバー・カウンター（夜）

酔っている高橋、グラスをあおる。

隣的美香、困惑。

美香 「……今日はもう帰った方がいいんじゃない？」

高橋 「俺さあ、課長になるらしいんだよね」

美香 「え？ あー、加藤さんの代わりに？」

高橋、ちよつとムツとなる。

高橋 「だからさ、俺、そんな悪くないと思うんだよね」

と、美香の手をそっと握る。

美香 「え？」

続いて、腕を美香の腰に回す。

18.

夜道（夜）

美香、スタスタ歩く。高橋、追いかける。

高橋 「ちよつと、待ってよ」

美香 「酔ってるだけですよね。忘れてあげますから」

高橋、手を掴む。美香、振り払って、

美香 「……あの、ほんと、無いです。高橋さんとは」

高橋 「なんで？ こんなに仕事ができるのにい？」

美香 「それだって、Aー任せなだけじゃないですか」

高橋 「……は？」

と、睨む。美香、怯えて、帰ろうとして、

美香 「おやすみなさい——」

高橋 「……お前だってさ、見て見ぬふりしてたじゃんかよ」

美香 「え？」

高橋 「……忘れてねえかな」

高橋、美香の腕を掴んで離さない。

抵抗する美香の声。

揉み合い、高橋、端末を落とす。赤く点滅。

19.

本社ビル・社長室・外観（朝）

壁の「社長室」の掛け札。

本多の声「懲戒対象者が既にこんなに」

20.

本社ビル・社長室・内（朝）

本多の手元、「極秘」「懲戒対象者」と記した資料。
パラパラめくると、加藤の顔写真。

相田 「Aーで業務効率化が進めば、問題になるのは暇な正社員の人件費です」

本多 「……正社員は、なかなか減らせないからね」

本多、資料を置き、窓から階下を見下ろす。

地上には、ビルに入ってくる出勤中の社員たち。

本多 「よく考えましたねえ。本当、Aーにしかできないことだ」

相田 「いえ、私はただ考えてもらっただけです」

相田の胸元には、端末。赤く点滅。

机に置かれた資料の一枚に、高橋の顔写真。

（終わり）